

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

詩南車

昭和三年六月二十日發行 ◇ 片寄耿二編輯 ◇

(宣言)

なせしたい。
貧しくとも純真そのものゝ歩
よき伴侶であらいたい。
者の力強い行進曲！
見つめつゝ眞實に生きんとする
生活から藝術へ自己の生命を

◀ 第七拾 ▶

目次

詩南車	詩	俳句	詩評	創作
針の木を下る 桐三題 伝達ち百姓 故郷(他一篇) 嵐の夜 詩三篇 たはじれ 指はじれんする プロレタリアの狂的詩形 パンの爲に 銀座スケッチ 涙の日記 札幌郊外にて 春(他二篇)	中館馬松 野村胡堂 高橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 耿 寄 水 田 片 清 福 山 安 石 経 長 奥 島 松 馬 松 中 野 村 胡 堂 高 橋 一 満 男 純 丹 一 浪 仁 賢 和 正 			

詩南車車窓より

×
鈴
木
勇

もう素裸でもよい時期だ。
六月と云ふ夏にも似た心がカーテンや、テーブル掛の色彩まで替りなくなる單衣のセルに小ざつぱりした氣持も味いたい。すんだ水の色明るい反響に耳を貸したい、眞實な筆に感情を溢りたい六月。

こんな時に詩南車の改訂が出るんだ。
どんな潤と想華とを書齋に運んで呉れるか詩友の等し
く持つ期待が胸一杯だ。
それは誰しも詩南車維持者の持つ忠實な心なのだ。

詩兩車活版に改む。「これからこそ何か仕出かすぞ」此の言葉は簡單だが意味深長。

それよりは谷崎物の狼文学が我々にはビツより来るよき
は一労働の言葉。

考慮するに、少くも二僕はプロレタリア文學の起りに就いては、少くも二點點を持つ物である、所謂十九世紀の起りの産業革命は階級的大割しにブルジョアとプロレタリアと、故に少アルは大アルになるかプロレタリアに成りましてしまふ、そして大アルに成得なかつた少アルの頭から生れ出た物に、なんだ、やて彼等には未だ小兒病的虚榮が爲て居て理解互角や驚かし式の文學の羅列がリ文學の頭を踏し居るに、二世紀プロ文學者も立つたプロレタリアの爲の、プロ文學を生んじ給へい、此の點に物にする。

針の木を下る

中野勇雄

あゝ、この周囲の白く重たい輝きよ

真夏の冷氣よ

足から 尻から 手から

冷めたく

俺は雪溪の愉快さを貧る

さッさッ さッさッ

足音は足音を嚙み

雪の音の滑かさ――

身体の重心を背後にかけ

カンジキを強く踏みしめながら

俺は木偶人形のやうに雪溪を下る

桐
三
題

館
高
重

子
供

たぶぶくろの様な

着物をきて

日向日向

東洋社會學者荀子

岡田四郎

總ての物が現在への過程は偉大なる苦しみや犠牲の歴史で有る事が多い。

勿論全部と云い得ないが、しかし根據と基礎とは念入で有つてこそ強くはないか、我が社會學も此の苦中の色々の過渡期を乗越して居るはずで有る。

オーギュスト、コント（一七九八—一八五七）が社會學なる一つの科學的體系を編成せし業績はこの稿の前提條件となる好材料では有り得るがしかし此の所謂新科學、社會學は偉大なる領野の社會科學中へ「社會學は社會科學の總體なり」とよび上げたのであつた。

然るに社會政策、社會問題、經濟學、心理學、生物學の各社會科學は此等新米に自分の領野を歩み荒されては居なかつたとして反駁論戰は切つて落されて、然るに此新科學社會學は科學としての漠然たる矛盾をさらけ出されて足のふみ場さい失つてしまつたのであつた。それ以後の社會學は混沌として其の持つ所を知らず所々方々へ學問的借家をなして歩いた曰く經濟、哲學、宗教等々。そして常に確立せる分課を持たず延び／＼して現在に到つた物であつた、今我等學問的借家人たる先輩が彈壓の中に探求して居た事を思はなければならぬ。

此等先輩を思わんとする時我々は彼等の學問中一個の体系といはず唯が中興の主であり唯が反動の主であるかとい確然として居ない事に氣が付く、曰く經濟學者中に或は生物學者、哲學者等、何々等已の立場を釋明し出來得ない程苦しみの中に有りながら社會學の獨立の爲に種々なる疑似社會學中に潜服しては何日かの社會學の爲に氣をはかんとして苦しんで居たので有つた。

のである。

百度近い炎熱に膝の様に萎えてゐなければならぬ。嫌な夏が来る、俺達プロを最も酷使してくれる夏が、氣忙しい俺達の人生にむくいられるものは、ノミ君と蛟君と南京虫君許りだ。

石井賢三

新春と共に詩南車に全速力で走り續てゐる。國人雜誌の致めたる中に詩南車が延び廣がるが一番速くはなから。詩南車を受する故か、それと致する故か何れにせよ。と詩南車の走り行方、事が私は、は常に嬉しかつたのだ。詩南車に接し約三ヶ月、ややや今度同人一人一人に入れて戴く事につつた、勿論此は歩行者である、何にも出来な、けれども詩南車の一人づつ以上は出来るだけの努力をしたいと思ふ、加増下さい。

進軍

片寄歌二

春芳漸く歎み、良縁始めて齎さず
日々に轉ずれば、青々たる綠葉、その間走り行くもの即
ち轉南風！ はち切れそうな念ひで走り行く 初夏の午
後……

詩雨車 さうく止り切れなくて車止めを突破す 如
何さし仕難い、止まる所に行かれば止らない、之を以て
我等は我等の果を我等の手で射撃したい

○ 進軍！ そうだ、我等は突進したいのだ

遊びまわつてゐる

子供

貧しくとも

元氣であらう

屋根の向ふに

花をつけた桐の枝。

月

いやにかすんで

見えてゐるが

あそこにあるのは

桐の木か

おいしいへば

手もとときそうな

月のはひが

たによつてくる。

朝のけはい

くもりぞらに

手をひろげた

桐の枝々は

は、花をつけたな

生きてゐればこそ

まあこらあたりは

なんとせいそな

朝のけはいよ

俺達と百姓

猪狩満直

無理に無理して働き パンを求める

無理に無理して働き 体を壊して丁ふ

パンを求め 働くことも

働きを休み 休息することも

俺達百姓にとつては

ごつちみち死だ

死だ

故郷

—舊友に送る—

馬場卯一郎

さあ山へ登らう

頂きに登つて故郷を見よう

なかい間離陸してゐる航海者にならう

現在の社會學が形而上學よりぬけ出でて一個確然たる或は基礎的な體系を得た今日、先輩の苦中を觀過的に放任する事は我々學徒の大なる冒瀆であると云わなければならぬ。

幸に現在に社會學史なる一分科が獨立して西洋諸先輩の勞はねぎらはされんとされつゝ有るが不肖余輩の研究の範圍では西洋諸先輩のみ獨り高唱されかくも盛大に東洋文明のはこりし孔子孟子の時代の歴史を持つ我が東洋が社會學者の一人も認められ得ないはずはないと思ふ、即ち我が孔子こそ好個の東洋社會學の始祖である自分は大言出来るものである。

彼の總てをなす思想は孔子や孟子の如く古への道及古來の風俗習慣又は禮樂制度の研究で其の道が正しいから此を行ひと云ふ主義とは違つて居た、所謂人間の本性を研究して其の本能欲望の必然なる所以を知り地を如何にし如何なる政策によつて治國泰平を期さんかを學んだのであつた。

これは「揚朱」の爲我説からの刺激とも云ふが自分は揚朱を知らない又ニイチエの其れに似て其れでもなかつた、故に孟子の如き性善説には大いに反對してそして彼の半生は此が爲に大なる論辯を費して居る。

「道は天の道でなく地の道でもなく人間が道とする所にあるのだ」と云つて居る。

欲望論では人は天性、欲望の所有者であるとして此の欲望は無限の物であつて其の爲に争闘が此の間に起きるのである、故に此を調正せんとするならば禮義分限を定めて欲望を保留し其の要求を充さんとするのである。

然し此の欲望の分限には限りがあるから制限を付けて王侯・卿大夫・士庶民の貴賤等級を附け其れに相等する分限で欲望の万足を充さしめると云ふのであつた、此の彼の合理的な所謂社會政策は實行の境にまひ進んだ、そして此の制度の行政の爲に「慶賞を以つて勵まし刑罰を以て懲らし職に安ずれば養ひ職に安せされば放逐する」と

云ふやゝ暴論に近い事を云つて居るが性惡説論者で又此の時代は戦口の世で血温い風の中での方針であつたから此の位の制度は決して無理でなかつたと思ふ。

兎角道ばかり高唱しその實行に苦しみ様論者の多い東洋學者の中に荀子の如き現實的な政策を持つて社會にのぞんだ事は彼の思想や實行の上で社會學者でないはずあり得ない彼は西暦前二六五年に「年五十才にして齊に遊ぶ」とあるから二一五年度の出生で八十幾才迄生じたものに見える。

荀子の傳記らしい物は極めて少ない彼もあの時代一ケの反動學者とし消へて行つたのであつたらう。しかし東洋に彼の如き學者即ち社會學者の有る事を我々は力説してやまない者である

「詩南車」の概括的批判

波立 一

三月十五日の共產黨事件、四月十日の三團體解散命令、帝國主義的資本主義にまで發展、轉化した、ある日本資本主義は、自らの矛盾の糊塗せんとして、兇暴なる彈壓を吾がプロレタリアートの前衛に加へた。

かゝる日本支配者階級の專制的暴壓の眞唯中に於て最早、中間階級と云ふ如き灰色的存在を許されない。

敵か、味方、か二大階級の決定的對立は、經濟的に政治的にも、中間階級はその階級的特質の歴史的必然により急速に解消しつつ、二大階級陣營の何れかに轉化すべき道行きを辿りつつある。

随つて、吾がプロレタリア藝術運動は、その擔當せる領域——資本主義制度下の藝術部門に於て、中間階級智識労働階級の灰色的な意識形態を代表する藝術作品に對しても充分に警戒する必要がある。何故かなら前述の如き日本の客觀的情勢に於て、中立を標榜するものは、間接的にブルジョア階級存在を肯定する

渺々たる青海原にただ一點
貝殻のやうに光る僕達の故郷
あゝそれが貧しければ貧しいほど
遠望する故郷は懐かしい

さあ山へ登らう

頂上に登つて故郷を見よう

僕は故郷を持たぬが故——

雲 雀

田園の青い縞から

ぼん ぼん 打上がる

ほがらかな

春の花火だ

嵐の夜

松 本 純 一

くらやみといふに

はのぼのとまんまるい しよくたいの

ひかり

みつめると みつめると

きいろのゆめがわをえがく

ゆらぐかげに てのひらをあつめ

ゆたかなる ちからのひびき

しづかなる こころのいのり

春夜他二篇

島 田 丹 光

月は障子を透した

ろうそくの火……火……

ひゆんーひゆんー

こんなにも更けた夜だもの 湿地に

幽な声えたー

あしの芽の生命のひびき ひびき

十月

秋のらん熟ー

冬と云ふに

あまりにも三十五のやめめ女が

ことによつて、反動的役割を演ずるであらうからである。

吾々はこの小論に於て、現ここに提出さるべき問題詩南車誌上の作品を決定する、それぞれの意識形態を摘發して、その階級性を闡明にすべき義務を感ずる。

そのために、吾々は先づ中間階級を分拆せねばならぬ、中間階級——所謂意識階級とは、一般に、或種の頭脳労働により、その所得である一定の報酬をうけとることによつて生活する點、ブルジョア階級の搾取階級に寄生する無産階級の一環である。

併し、彼らは所謂勤勞階級であつて、決してプロレタリアートではない。

資本主義壓制の下に、プロレタリア階級の血みどろの生活と、階級意識の尖鋭化に對して、彼らは長い間の中立的な寄生生活の故に、妥協的な功利的な社會觀に蝕まれてきた。事物を抽象的な思惟によつて觀察し、解決しやうとする傾向が可成りに強く、平和、神、自由平等とかの自慰的な語句に魅惑され、昂奮する。

「詩南車」四月號に於て、かゝる傾向をもつともよく代表する作品は、戯曲「白日の夢」である。

「白日の夢」は、まさしく文字通りに階級闘争の激化しつつある現實から妥協的な性によつて逃避せざるもの、夢である。

プロレタリアートが、汗みどろ血みどろの花を散らしつゝあるとき、彼は陽當りよきベランダに寝そべつて「おごそかな神のみ聲」に隨喜のよだれをたらしてゐるであらう。

多分に作者の意識形態であるだらうAの發見（？）した點と、プロレタリアートの鎖とは、決して同一のものではなく、Aのさけぶ「自由」と、プロレタリアートの語る自由とは斷然と異なる。

Aの叫ぶ「自由」とは、欠伸から欲求されたものであり、恐らくはブルジョアの走狗である神様に、「徒らなる自由の狂はしき叫びは、大衆の安寧を亂すのみ」と叱られ、他愛なくも參つて了ふ。

まことに、彼らの自由の叫びは、プロレタリアートのそれではなし

に、「徒らなる自由の狂はしき叫び」なのであつたのだ。

彼らはその階級性からくる唯心論的世界觀の故に、事物を皮相的にのみ觀察し、潜越にも、無産者解放運動に對して、「徒らなる自由の狂はしき叫び」と嘲罵することによつて、ブルジョア階級にコピを賣り、自らの中間的立場を安定せんとする功利的意識の現れの以外何ものでもないことを暴露してゐる。

「白日の夢」の作者のかゝる態度——社會觀は、プロレタリアートから觀れば、小ブルジョアのリベラリズムとして、間接にブルジョア階級を擁護するところの反動的思想の故に、斷呼として排撃されるに由ないものである。

前章に於て、「白日の夢」を構成する意識形態を分析し、批判したが、それと別な立場から残れる他の作者意識形態——階級性を分析究明することにする。

中間階級——所謂勤勞階級がブルジョア階級の搾取余剰によつて生活するといふことからして、直ちに、ブルジョア階級の番犬をつとめるものと云ふ論理をひき出しはしないが、プロレタリア階級に比べて、幾分の餘裕のある彼らの生活は、プロレタリア程の闘争力も可能な共産主義社會の實現への強烈なる行動をも起し得ないものである。

隨つて、彼らの叫びは、「徒らなる自由の狂はしき叫び」に過ぎないものであり、彼らの藝術も、必然に、その中間的立場の故に、二大階級との不調和からくる絶望となつて、著るしく自慰的な、とりとめもない獨白となつて現れてしまふのである。

かゝる傾向を代表するものは、「曙けられる女」「國を賣らう」「欣求」等であつて、そこには、生活現象に關する何らの批判——所謂心の糧を求むる事が出來ず、中間階級的内容を、慥めなく表白されてゐる。

吾々に繰返さるべき以上の作品に對して、「國道小景」「導火線」の無産

さびしがる

月夜

すり硝子に

透明な水色の接慮です

わたしはそつと微笑む

——あした素敵な散歩。

たわむれ

奥田浪路

はかなき戯れごとと思ひつゝ、

あな怪しくも我が胸踊る

たはむれとなしつゝ胸の踊るなり

この喜びをまこと、いはむ

戯るゝ心持たずば今の世は得べき

愛すら得ずや終らむ

我が父と母とより享けしこの性の

我が心をたわむれしめず盗人が

物ぬすみする喜びを戯れそして我れ味ひき

指はけいれんする

長瀬一美

ペンは握られたまゝ、

無空におのゝき

たえず

沈黙を破つて 指はけいれんする

まさに 爆発は保たれるが如く指はけいれんする。

プロレタリアの歌へる狂的詩形

桎村仁介

重たい風

俺を化石にさせそうな夜！

遠くで自動車の爆音

バツと吐き捨てた痰唾

恨を飲んで微菌が無数に繁殖した

及の空氣が——

俺れのただれ切つた身に挑戦する。

階級的作品を提供して呉れたことを感謝する。

「導火線」は起き上らうとするプロレタリアの魂をもつて描かれてゐる点、力強く吾々の胸を衝く。

發洩たる、しかも沈痛な姿に於て、プロレタリアートが吾々に呼びかけてゐる。

吾々は多くの無産階級的作品に接するけれども、かつての小ブルジョアの藝術教養の餘沫をぬきぬ人々をみる。餘分なことが盛澤山に描はれるために、作品が遊んでゐる無氣力であることだ。「國道小景」の作者も幾分その傾向をもつてゐる。

作者の意圖が、虚たげられた小作人を描くのか、單に、國道に興味を感じてゐるのか、作全体がベールに覆ふはれてゐるやうで、「盛り上り」がなく、力が散れてゐる。

兎も角、この作者はハッキリと事物を掴むことが肝要である、「何々の様に」と逃げてばかりゐてはいけない。

作者の技巧が、可成りの点にまで洗練されてゐる点、感服に値するか、技巧は、あくまでも内容によつて決定されることを吾々は忘れないであらう。

一般に、プロレタリア藝術家の任務は、プロレタリアの主観性——世界變革の意志と、それより生ずるプロレタリアートの感情を正確に組織し、表現することである。革命的な世界観なくしてプロレタリア藝術家は在り得ないと同様に、プロレタリア藝術家はその本質に於て、彼自身プロレタリアートであらねばならぬ 完

冥想片語

佐藤義家

私は自分の作品に就いて其何れにも眞實の苦心を止めてゐる積りだ

が——として優越を感じた物がない理想の勝つてる精が如何しても瞥視してしまふのである

私の心の最も沈靜になる時は夜であつて随つて仕事をするのも夜であるが私の頭に思想を満して呉れるのは燈芯である燈芯を凝視しながら一句一句白紙に情を蓄積して行くのは愉快だ

裏の山で鼻の鳴く時がある人々は鼻の音を聞くとぞつとする云ふが私は阿羅漢だちつとも淋しくはない

又川鼠の水くぐりを聞く時もある恐ろしい音を立て、叢に這入つて仕舞ふそして後は一段の寂寥に化すがかへつて心に空虛が出来て非常に、

夜となれば斯の様な好都合を提供されてゐるのであるが私はそれに就いて少しも善處して居ないのである詩にしろ歌にしろ全くもつて寡作の方だ

一ヶ月を通算して五乃至七その位であるが始めは別段氣にもしなかつたが此頃人々の多作を聞くと追従したくもなり又妙な嫉妬を感じる様にもなつた

人間程可笑的な者は他に先づないであらう巴の關知せなくてもよい所へ妙に思惟を徒費して物にのら疲勞を招來して居ると云へば

然しながらこれも人間社會の一現象と云へば又可愛い所もある斯して採つ採れつ生きて行く所に向上發展の導化を講せられるのであるから……

パンの爲め

石井賢三

どんよりと曇つたそら
黄昏の町は忙がしい
車——自動車——
一日の労働を終へて
家路にいそぐ人
パンの爲めとは云へ
氷凍地獄を歩む様な俺
飢と疲労の体をひきつづて
宿はづれの醜い長屋に歸る心細さ
家には妻と子が不安そうな顔でまつてゐる
五燭光の電燈がそれ等を
哀れむ様に照らして居る
「又今日も口がなかつた」と
やるせない吐息を吐く

銀座スケッチ

安齊和三

魚河岸の兄イ連は
朝.....

トラックで景氣良く
カフェーのウエイトレスや
球突きのゲーム取りは
朝湯へと
玉の足跡は
塵芥の一部へポツチリと
夕.....
仕事を終つて
一息ついたら
銀座通りを
雲梯車か通つた

涙の日記

山路たどる

いくらよんでもめくつても
日記は悲しき事ばかり
つい先程は母が死に
今またいとしい妹の
病の枕にはべる我
一二二三と友達

創作 賭けられる女

山口生

賭けられた女はテーブルに立つた
小止まない肩の迫る息づかい.....蒼生.....
その肩で眼を拭く.....涙.....空々しい涙.....貴様が.....
紅の濃さが鱗に光る唇に残す虚偽の果てを何でじつと噛む
愚かさにはかられて、賣られて来てゆく女ならすすり笑へ.....なほ賭
けられる女ならじつと噛むだ唇ですぐ笑はなければならぬ.....な
るまい.....

「ペロンスの奴には御信心が多いからな」
「フー！ だからこそ 阿魔もいよ／＼賭け札の御厄介さ」
「もぐり探偵」の口元の冷笑とそのズボンのポケットの右手にしつ
かり握ひだ賭け札にこの男の本性があるならペロンスの今のあの
姿に何があらう.....
それより地下室赤線クラブの本能的機關を偉とする程人間の安價
な極地を表現してゐることの滑稽を誰が描きうか

萬物のその本体へかへろらとする今.....
自然はその人々への自己のたましいに逆ふことを許さないはずであ
る
求め得べくんば與へ 與へ得るればその本能にひたるマヒを乞
ひ願ふはづである
精隨がただれて隆動脈に弛緊を來たそうとも自己の性は忘れられよ
うか
右へ

K街道りの十字路には今も青い光りの「注意標」がぼんやり突立つ

てゐるんだらう
眩惑の空氣の余塵はその十字路の地表とこの地下室にへだてない公
平を「神様」が敷へて下さるつもりか
右へ 右へ 九いテーブルと椅子と拾手のない人間の起伏の室を
尙右へ右へ.....
人造大理石張りの圓柱の左右に立ち並ぶ照明燈の消えた廣間へ.....
なほ そのありかを覺ゆる余光を求めて右へゆけば扉のキチンと
閉つた小さな室を敷へやう その鍵穴をちつと覗いて見る氣になら
ほんとうの人間のたましいが何れも二つながらその本体に従順なる
べく或はな程の親しさを見られる——

東洋のある小さな島國の奴等はアイスクリームリダを好んでか
ぶりつくといふのはほんとうだつてさ
よつぽごすきな人たちなんぞう.....ね

長靴下を脱がせるには骨の折れるものにちがいない
たとへその靴下が人造絹糸製であつても淡い桃色であればその手
ざわりと氣分が.....

絹のハンカチに香水はかとされないものだ.....

ぼんやりその廊下でこんな謎を考へてゐるよりそんな甚助野郎にで
も 賭けられた女の立つてゐる臺を押さへさせた方がい、.....
——と思はれる

男ばかりを見る目もしびれを人に思はせる
燃やす吐息は唯僥倖にして得やうとする接吻と抱擁へ.....
生噓を含み官能を失らせ見つめる圓盤の銀針のするごさに心を傷
める

指を数へてあの人を
まつたのしさに引くらべ

上言まちに妹の
母よ！母よ叫ぶ身を
いたはりながら書記す
日記は悲しい事ばかり

札幌の郊外にて

福田 將 夫

黄昏のミューデツクの
長びくすゝり泣き
ものろげな疲れごころ
わが胸は惱まざる

心はふさぎ顔は蒼ざむ
またも終日を告ぐる
ニコライの鐘の音は
あはれむ者のさびれ心にいたく惨む
あゝ 心せぬ夕風に吹かれて歩む

静に惱める心はうちふるふ

夜外一篇

清水 綾 子

しみじみと肌寒むい夜
ひとりである
蟲の音が
ほんとに身にしみる

失 題

今日もまた
空が青い
若い少女の瞳の様に
悲しみがうつたり
あゝ黒い影は落して
鳥が横切つて行く

春 (他二篇)

片 寄 耿 二

春はほこりにまみれた風に吹かれて
太陽との雲の着物を着て喜ろこんでるけれど

廻れ……廻れ……
幽魂のたいまつを末梢神経に漲させる人間の男達とちつとそれをそ
しりながら悔ひる外道の女達を色む地下室にその吐くせつなくの
暗紫色の息に刻まれる「時」がすぎる
やがては……ついに……

針……と……圓……盤……の……敷……字……が……
かさなつた……！
骨と皮との間の細胞が高壓に傾く瞬間の撃動力の総位の係数を加算
する科學者は居なくともこの群れ人達の急變を表象する 罵詈
慘罵……咆哮……嘆息……
深夜の果しなる時こそ「惡魔の勘定時」である

ビストルが……一發……一發……
電燈が消えて……黒色の静寂へと世界が急轉する
唯 銃光の氣味よき閃きの赤さ
闇の中になにもものか光る
闇の中にけだものがうづくまりうごめく
闇の中に惡魔の息がする

圓盤の下あたりでかすかに泣いてゐるのが暗けられた女だらう？
？ ？
(をわり)

戯 曲 或る兵士と女

鈴 木 勇

軍長——孫 遊女——花撰
其の部下——淳 同——乙月
同——張 同——紫蘭芳

同——季 其他兵士多数

「ある國のある戦ある午後の休憩時兵士三名戯曲には、ついで語つてゐる……」

(一)

季「おい見たか」
張「見た」
季「何を……」
張「あれだらう」
季「あれだぞ」
張「あの赤犬か？」
季「そんなもんぢやない俺あ見た」
張「それぢや何んだ」
季「淳お前見たか」
淳「見た」
季「あれだぞ」
淳「あれか」
季「何處で見た」
淳「なんだ」
季「あれをさ」
淳「あれつて西瓜のことか」付近の畑にある西瓜を指す
季「それぢやあれをお前知らねいんだな」
淳「なんだ」
季「あれをさ」
張「あれつて何んだ」
季「俺あ見た……あれは俺に惚れて居るんだ……それから俺あ見た
んだ」
張「俺も見たか」
淳「俺も居たか」
季「お前等知らねい。俺あ見た」

ひからびた海綿のやうな牧草
病みほうけた赤土の上に

春の精液を吸ひながら縮れ毛の少女が
まんまるい瞳をとりとさせて

恥しらすの犬の情事など見てやしない

春の午後

めそ／＼泣きだした赤ン坊の頬べたの觸感
熟しきつた水蜜桃のとりける味感

掘り出された蛙は

充血した赤い眼玉で青紺の空を見つめてゐる

百姓

おき忘れた馬鈴薯
納屋のすみにちよつびり芽を出した
馬は

暗い煉獄から解放されても

廣野で直立ちなごしやしない

詩南車詠草

島 末 蒲 洋

そのかみに別れし友のおもはへて此月の夜を寝ねがて
にある

いく夜かを涙うかべて眺めたる彼の病院の窓の月かな
うつ／＼なく夜汽車の窓に身をよせて聞くは遙けき潮鳴
りの音

夕焼の空をうつせる海の面をおほごかに飛ぶかも鳥
かは

月の夜の海はあまねく輝きて島の踊りの太鼓きこゆる

白 木 英 尼

春まひる李の花はあかるかり空の匂ひのうつりてゐる
も
ふきあつる風のあるらむひとつ二つ李白花ちりそめに
けり
しなやかな素鵲のたぎりの間えくるとなりの家は人の
居ぬらし

張「何處で見た」

淳「何んの話だ」

季「孫が連れて行くのを見た……儘かに花撰だ」

張「孫?……軍長」

淳「花撰を何處へ連れ込んだ……俺あ見なかつた」

季「俺あそれを見た」

淳「花撰のことならお前予約ある……俺らお前から聞いて、知つて
ゐる」

張「孫軍長猶いや……あれ好きある明日戦争……女取る悪い、孫軍
長ベケ」

季「俺あ見た」

張「何を」

淳「外にか?」

季「お前見たか」二人をかへり見る

張「見ない」

淳「知らねい」

季「俺あ見た、外に女子二人居た」

張「張顔を見合す」

季「居たかも知れねい」

淳「おつと乙月も居たのか」

季「居たかも知れねい」

張「居たのか」

季「居た」

淳「乙月も居たのか」

張「孫は軍長ある、女可愛相ある、紫蘭芳乞度死ぬある俺一人頼み
にして居る」

季「困つたな」

淳「困つたのか」

張「弱つたな」

淳「弱つたのか」

季「明朝戦ある張行くか」

張「行く」

季「淳お前も行くか」

淳「行く明朝給料渡す金貰ふすぐ逃る」

季「金もらつたら女連れて逃げるか」

淳「逃げる……お前も行くか」

季「行かねい、俺達戦地へ行く、孫軍長一人、女三人残る、花撰氣
が弱い、俺居ない女死ぬ、戦休む」

張「休むのか」

季「俺あ休む」

淳「俺もか」

張「俺も休むのか」

この時戦地へ行軍のラッパが鳴る暫くは兵士の銃音等聞ゆ、季
張、淳の三人民家の納屋に忍んて居る

張「もう行つたか」

淳「孫軍營へ見張に出掛けるか」

張「見張るか」

三人漸くの事納屋より出ず、効外薄暗し、電線、電話既に不通
となり民家の燈心がチラホラ

季「軍營だ」孫軍察官屯所の門扉の處で立ちとまる

張「軍營か」季、張、淳の須に銃を抜いて續く

張「見いるか」

季「見いる」

淳「俺にも見いるか」

季「見いる」

島 田 丹 光

うちづくくみとり堤の涯にしておち山なみの雪はとけぬる

おほなる月の夜更けし静もりにかたことと蛙の鳴くも

おのおのにも色にぎはせし春逝きてなべてみごりの初夏は来にけり

島 末 真 之

松杉の群立木木の高梢に見ゆ空の青さに鶯のまひをり
そよ靡く麥穂がぐれに笑ひつゝ若き夫婦の野良歸り
見ゆ

しみ／＼と身に湧く疲おはへつゝ持つ鐵の柄をしめらせにけり

鈴 木 佐 代 子

たまゆらにいのちさへげてまつものを窓邊の蔭を吹くはゆふかせ

いさゝかの恨み心地の敷にしてつきぬ涙となりけるかな

奥 田 浪 路

うぐいすのなく音とはしき深谷のをぐらきに咲くむらさきのふじ

さとうきよこ

悲しさのきわまり来れば涙さへわりなく我をうとみてくるや

横なぐりに涙をはらいて強くなれど更にひささく一片のきぬ

清 水 綾 子

あてもなき思ひたごりて上りたる丘にうれしき野いばらの花

窓あけて星影淡き空仰ぐかわれる時のわれのならばし

張「なんだか見いねい見いののか」

季「まっと上だ」

張「こ、か」

季「穴はまっと上だ」

淳「叱ッ……叱ッ」

張「誰れだ叱ッと言ふのは」

淳「叱ッ……叱ッ」

(未完)

(二)

室内に軍用テーブル一個、椅子三個あり机上に軍用電話と兵士給料表を置き、女三人が片隅に居るこの時東入口より孫軍長の部屋に副官入り来る

副官「女をい入り乍ら」軍長殿只今、戦時部隊は比二十支里に向つて行軍を開始しました、張、季、淳の三名が行衛不明であります、彼等は死刑が正當かと思ひます以上」

作 即 興 曲

鈴 木 茂

或日、それは丁度午後三時頃でした、私はいつもの通り茅場町の電車交差点の東角で、数種の夕刊を並べた低い臺の側に立つて鈴をならしがら、見るごもなく往來の目眩しい有様をながめてゐました呼子を口にくわへて狂氣のやうにキを振る青い腕章の交通巡査、ひつきりなしに續く小さい圓タク、がたんごんと疲れた騒音をあたりの建物に反響させながら十文字に行違ふ市民の足、ある市電、それ等の乗物の渦巻と、紳士、學生、モガ、労働者等あらゆる階級の人種の雜踏實に統一のない騒音と色彩の混然たる一大交響樂です。

さうした有様をぼんやりながめて居た私の眼に、その時ふと向ふ

角に今ついた州崎行の電車から降りた二人の鮮人労働者が、はいりました、一目見たきりで、誰しもが鮮人労働者となつて彼等の服装——陽にやけた熱顔、悲しうな薄眉、希望のないごんよりした腫、さうしたものをみると何時も私は何といふことなしにうら悲しい氣持にならぬわけには行かないのです。

そしてそのたまらない氣持から、何時も私は彼等から目をそむけてしまふのです、だつて私には氣の毒なやうな、淋しいやうな氣がして、とてもじつといつ迄も見では居られないのですもの、いつ迄も見では居ると丁度この淋しい自分のカリカチアを見せられて居るやうな氣がして來るのです、でその時もさうした氣持から私は彼等から視線を轉じやうとしました、と、今彼等が降りた電車のマドから車掌が上半身を乗出し彼等に向つて何か大聲にわめいて居る、その様子から見ても車掌は彼等について怒つて居るのではなく、何か教へやうとして居るのは明瞭です、彼等はと見れば、車掌のさうした努力にも氣付かないらしく、角の電信柱の影にん行で何か小さな紙片をながめて二人で相談し始めました。

どうやら乗換切符を見ながら行先を思案して居るやうです、どうもわからないらしく、彼等は乗換切符と十文字に行交ふ電車と交互に見くらべて居ます

私はすぐ行つて教へてやり度思ひました、彼等が私の側に立つて居るのだしたら私はすぐ彼等に近づいて行つて教へてやつたでしょう併し相憎それは向側です、そこ迄行くのには所謂親知らず子知らずの車道を横断しなければなりません、しかし私に仕事があつたらそんな事は何 もなかつたでせう、私は今大切な仕事をしして居るのです、新聞の呼賣なんて小さな仕事かもしれません、併しこれだつて立派な而も神聖な職業です、時々ですが新聞を求めて行く人があります、その人達にはたとへどんな事があつても迷惑はかけたくありません、二人の道のわからない鮮人労働者に道を教へるのは誰

鈴 島 黎 子

雨の音故郷にのこせし君思ひ静けさ夜半に一人なきゐる
灯に影をおとせる人形に賜りし友のかげをおもへしの
べり

水 町 冷 子

かそかなる小雨にけふる灯をうるむまなこに我は見えて
居き
灯のともりし雨の町中を友としみじみ語りゆきたり

荒 岸 小 百 合

雨後の陽にかわく匂ひの芳はしく庭一面の春のくさか
も
いと今朝は氣分進みて窓見れば風にボブラの静う掛け
り

新 妻 綾 洋

夕焼けのすゞきの丘に君を戀ふひとり寂みしくよしき
りの鳴く

佐 藤 義 家

さゆれなく見はてけしき村霞かすめつすぎぬ汽車の
朝たび
ゆふされば常緑樹にまぢりひもこの桐の若生に心はせ
てむ
敵の麥のうれ穂がくりに實ひとつのケ栗あをいなる葉
がいかさねつ

×

朽ちにひの寺のみ墓にかげながき鬼子母神社の五輪か
れり
憂きごに身をやつせるもくしきなり現世に遠き祖母
のありしこ

にでも出来るが、この新聞賣は私か居なかつたらお客様・迷惑をか
けます。

もう二人も互に相談することをやめてしまひました。だまつて乗
換切符と電車をかわるがわる見て居ます。往來には相變らず何百何
千といふ人がすれ違つて居ます。併しこの行先のわからない氣の毒
な二人の労働者に注意を向けやうとする人は一人もありません。皆
忙しうに歩いて居ます。

前には強く思切つて見ましたが、私は何だか氣になりました。あ、あの立派な紳士も見えぬ振をして過ぎてしまひました。めか
し込んだ女學生は殆んど鼻汁もひつかけないといった態度で過ぎて
行きます。あ、又あのにやけた大學生も知らん顔して過ぎて行つて
しまひました。

あ、どうも氣になつてたまらない、一層思切つて鈴を投出して
馳出さうか、いや待て、あそこに立どまつた會社員らしいのが教へ
てやりさうだ、おや、そのまゝ道を横切つてしまつた。

え、もう駄目だ、どうなつてもいいから馳出さう、鈴を下にお
いて、乗物の洪水の切目を見つけて走り出さうと顔をあげた瞬間、
仕事にあふれたのか力なくうなだれて来た一人の可成の年の労働者
ひよいと頭を上げた時、二人のさつきから困つて居る鮮人労働者が
眼に映つたらしかつた、つか／＼とよつて行つて彼等に話かけた。
何か二言三言やつて居た、二人の目には何か感謝の光が見えたやう
な氣がした、と、その年をとつた日本人の労働者は手招きをして二
人をつれて、道を横切り、丁度そこへついた猿江行の電車に二人を
押込むやうにして乗せると車掌に二言三言何かつたのむやうでしたが
電車が動きだして行つてしまふと、別に後を振り返つて見もせず無造
作に向へ歩き去つてしまひました。

ほんの一寸の間でした、ほんとうに呆氣ない程短い間に簡単に事
柄はすんでしまつたのでした、私は呆氣にとられた形ではんやりし
てゐる自分に氣がつきました、そして元の位置に返ると元氣よく鈴

を振りだしました。

何だか急に氣が輕くなりました、あの労働者が丸で石ころでも蹴
飛ばすやうに平氣な顔をしてやつてのけた美しい行為が、自分でやつ
た事のやうに無性に嬉しくなつて來ました、何だか「俺はどんな奴
だつて恐れはしない、俺は偉いんだぞ、俺は偉い労働者なんだ」と
大聲に怒鳴つてやりたいやうな氣持になりました。

文 散 戀・友情・戀

島 田 丹 光

—美子さん！ わたし今日貴女に改めてお願があるのよ。

—え？ お願ひ！？

—え、お願があるの……貴女でなければ出来ないことなの、聞い
て下さつて？

—え、わたしに出来ることならなんでもお聞きしますは！

—有難う！ それはあの……光彦様のことなの……わたしもうと
ても快くなることは出来ないと思つてゐるの……

十七の少女の語めは悲しくも和んだやさしい心です

—い、わ！ 嘘よ！ きつと快くなるは！

—美子さん！ 貴女だけは一時の氣休めを仰言らないで下さい！
却つてさびしくなりますもの……

庭の銀杏の葉がハラ／＼と秋を囁いてゐるのです

—美子さん！ 私に代つて……光彦様を……お願ひです！

自分のない後の氣弱な愛人の身を思ひ、あまりにも純なやさしい
心です

愚めやうとしても握り締めてゐる友の弱い力を感ずる自分の手に
……あまりにも悲しい胸やぶれるつらさなのです

六人集

佐川満壽莊

月涼し裸御する裸馬
夕闇のせまり兼たる牡丹哉
峽の雨卵の花寒き夜明かな
薫風やヒタ／＼満る磯の潮
鐘つくは女なりけり花の寺

石田修二

明るさに晝の雨見る牡丹かな
夕立の老鶯の啼き濡るる
風に動く麥酒の泡や雲の峰
水打ては旋風起つ眞晝かな
紫の山繪に見えて青靡

新島生

新緑のまごに一と日を讀書かな
街路樹の若葉の下のポストかな
撒水車のみが通りし夏真ひる
還稿へ細評を付す日永かな
釣竿の尖や動かぬ雲の峰

高木柳江

湯泉の宿に来るらしき灯や蛙鳴く
湯つかれを欄にもたれて蛙聞く
点々と棚田の石や蛙鳴く
遠くより鳴き始めた蛙かな

奥田浪路

葉櫻に物思ふ子の月夜かな
長閑さや鐘の音包む曇り空
櫻ちり山の景色の新たなり
今日も亦酔ひて暮れけり花盛り

美登利

山々の色も新たに御代の春
榮へ行く御代の色なり山の春

銀杏の葉が又ハラ／＼と窓硝子をすつて散つて行くのです

2

—光彦様！ 美佐子さんがなくなつた夜もやつぱりこんな美しい
月夜でしたわ！
—美佐子さん！ 僕は美佐ちゃんの前 もう一度逢いたかつた
よ！

去年の日の悲しい追憶は二人の胸に新しく甦るものでした

—あゝ！ 美佐ちゃんは今頃……きつとあの天国に……
幻想的な青年の瞳は散りばめられた星々を見上げるのです
愛人の身を自分に頼み、静に逝つた友を思ふと、未だ一年の後の
今日までその頼みを果し得ない不甲斐ない自分……い、え美佐子の
言葉のない迄も心ひそかに思つてゐた光彦ではなかつたか。以前は
光彦と美佐子の戀の擁護者であつたけれど、今は美佐子は美佐子であ
り、美佐子の魂は以前の美佐子でなければならぬ筈ではなかつたか
？……

—あゝ！ なのに！ それなのに！ 不甲斐ないわたし！

やるせない美子の胸、悲しい瞳は頬に銀線を引いて、冴え切つて
ゐる月の面に投げられます

—美佐子さん！ 許して下さい！ 美子は未だ光彦様のお心を慰
めることが出来ないのです！

狂はしき悲しい問え！ 美子は窓に寄つたまゝ、嗚咽するのです
—美子さん！ どうしたの？……

—え？ どうしたの？ え？ 美子さん！
—……みみ……光彦様！

青年の胸にひしと取りすがる美子でした！
訴ふる様な、やさつく様な、キラ／＼と輝く黒真珠……少女
の瞳……

光彦の胸にハッと甦るもの……その瞳を見た時に美佐子の逝つて
からのこの美子の總てが甦るのです

一秒……二秒……三秒……七秒……八秒……

—美子さん！

—光彦様！

轟と抱き合つた二人……そして最後の一秒…… 高價な一秒……
二人は友達ではありませんでした

最後の一秒は二人の過去と未来との間に太い割線をしるして過ぎ
て行きました

空に金星が一入強くまた、きまます

翌日の夕刻です。美佐子の墓前に一人の少女がつゝましくひざま
づいて居りました。

散 冬 夜 小 景

中 木 良 一

藤本と俊子は並んでこたつに入つてゐた。

藤本は十八の、とし子が十七である、彼れとし子とは従妹同士
で彼れはとし子の家に厄介になつておるのであつた。

淋しい程静かな晩だ、外は小雪がチラ／＼と降つておる、町はつ
れの事として夜はしんとして殆ど人通りもない。

藤本は蒲團の上で、書友が置いて行つた同人雑誌を開いてゐたが
殆んど讀んでゐなかつた、只時々頁を繰つてゐるのみだつた、とし
子は無言の儘白い毛糸をたくみにあやつつて、編み物々してゐる。

藤本はいらだしいやうな焦燥に襲はれて、妙に騒がしく彼の心
藏を打つた。

—どうすればいいのだ——彼のいらした心はこう叫んだ。
殆んど成熟きつた豊満な女性の肉体から傳はつて来る呼吸の響

詩評

K K K

○ 詩行脚

丘汎之助「最後の線にて」力の詩である、だから魂にショックをおぼれる、詩中で一番光つて居る。

欄崎耕造「妄想」テーマと同じ詩だ、鋭さがない、こんな詩だらむしろ書かない方がいい。

○ 黄十詩脈

高橋唇二「帆」誌中で見られるのはこれだけ、後はあつてもなくてもいい様な詩。

○ 無軌道

中野勇雄「山の暴風雨」特異な詩材が動いてゐる、ごん底を想はせる力強い思想が横倒つてゐるのが感ぜられる、誌中ではこの人の詩が何時も光つてゐる。

石川武夫「四月三日」素直でいいと思ふ。

○ 牧人

杉山三郎「女」不愉快な詩だ、こんな詩は五年も泥の中に埋めて腐らしてから出したまひ、そしたら菜葉位の肥にはなるよ。

○ 詩美學

感じが良かった詩は

松本駿彦「木」

佐野四十雄「春となる日は」「春情」

伊藤久馬夫「河に流れた溜息の詩」他一篇。

高重「月夜の蟲」他の二篇は何時もより印象がなかった。

房山秋子「からたちの花」延びる人だと思ふ。

○ 民謡列車

生田花世「蛙」悪い事はない。けれど要するにあんなの蛙は、都會詩人に都會人ありても、農民詩人に農民なし（詩美學、五月号）の類です。

大貫芳江「潮來の灯」あんなのお顔、ごこかの本で見た事がある。真赤な戀、青い戀、云々。あんなよ、あんな。矢張り戀はいいでせう。

○ 冷燈

三浦東夫「偶成」無味乾燥な詩、自惚れちやいけな。これよりか悪くない詩がうんと御座るで。

○ 蒼穹と理髮師

遅れた批評であるが、詩策も皆良かった。取り譯け良かったのは、そして批評出来なかつたのは。

井上春彦「朝の寫生詩」

深川邦哉「港街夜曲」

批評出来るのは

きが、一層怪しく彼の胸をかきみだした。

——彼の女は俺にすべてを捧げて居るのだ、彼の母もそれを認めてゐるして居るのだ、俺の心一つでとしは完全に俺のものになるのではないか……、どうすればいいのだ俺は……。

藤本はそつとし子をぬすみ見た。

彼の女一生懸命手を動かして居る、彼はそつと本を伏して、そして事に無關心のやうに動いてゐるとし子の手をみつめた。

「とし子さん」彼は静かに呼んで見た。

「なあに？」とし子は案の外無邪氣に手を動かしながら答へた。

「僕も二人きりでこんなにして居てどんな感じがするの！少しも不安を感じない。」

「いえ、ちつとも」とし子はなほも編物を續けてゐた。

——不安どころか、すべてを投出してゐるのだ……と彼は思つた

「藤本さん」温いこたつに上氣したややうな彼の女の顔が今迄になく美しく見えた。

「藤本さん」

「……」

「この間云つた事ほんと？」とし子はつとめて平氣をよそうて云つた。

「この間云つた事何？」

「あれ、いつか私が××の叔母さんの處へ行つたでしよう、その歸りにあなたに會つて一緒に歸つたでしよう」

藤本はその時、とし子さんの様な人に戀して見たいと、云つた事を思ひ出した。

「あの時おつしやつたこと、ほんと？」

「あ、ほんとだよ」

藤本はうなだれて、やるせなさうに毛糸編み手を動かして居る俊子の横顔をじつと見つめた、苦しうなあへきが、——彼女の女の肩を大きく動かしてゐる、——そうだ、俺は俊子を受してやろう、

温い心を以つて彼女を抱擁してやらう、俺だつて赤い血が流れてゐるのだ——、彼れは妙にとし子が可愛くなつた、同時に心の底から起つて来るらしい衝動が彼を極度にもだえさせた。

藤本はいきなりとし子を固く抱きしめた、そしてコケツトにうるんだ彼の女の腰をじつと見つめた、とし子は從順に藤本がするままに、彼のかひに抱かれて、情熱に燃ゆる立つ眼で彼を見つめた、心臓の鼓動が着物を通して繁しく響き合ふ。

藤本は誘惑的な彼の女の赤い唇にすいつけられるやうに、熱した自分の唇をいつまでもいつまでもおしあてた。

次の瞬間、二人は蒲團の上に突つ伏してしまつた、そして無言のまま喘ぐ音が聞えて来た。

小品 月見草

小 杉 露 子

夕暮の河原には夢の様に月見草が咲いてゐた露繁い草の陰で蟲がデツと鳴いてゐる。

静枝は唯母について黙つた儘、足を運んだ。

「綱が！ひぐらしが鳴いてゐるね。」母は悲しそうに夕焼の空を見上げた。

二人は何時しか岸に降りた小舟に腰を下してゐた。

小波がサッ、と淋しい音を立て、舟べりに寄せて来る。

「ねえ静ちゃん、今日もこれ、お別れせねば不可なわね。」

「さうね、でも別れたくないわ」静枝は悲しくなつて来てデツと唇を噛んだ、何ん、云ふ哀れな自分であらう、生みの母親を持ちながら一つ所に居られぬ今の境遇！静枝は湧き出る涙をソツト拭つた暮島が水面をかすめて、低く飛んで行つた。

大橋真弓「遊女沐浴」喘みしめれば、喘みしめる程この人の詩策に親しみを待つ。

吉澤獨陽「武藏野車窓詩篇」あとの三聯が良く生きてゐる。

○表現人

島田丹光「山間の思索者」こんな詩を書く様になつてから時として良い詩が出て来る。あまひ詩には僕は中毒してゐる。

◇小品文◇

心の扉

福 本 楓 花

空は青々として青葉若葉に風薫る初夏の午後の太陽を身に受けて、若草燃ゆる田のあせ道を二人はたがいに思い／＼の何事かを考へつゝ、細い道を前後して歩むともなく歩み続けた永い沈黙はつづいた……幾分か……「Y君……淋しくはないか？」友は静に口をきいた「淋しくない」とつとめて平然とよそはつて見たものゝ涙ぐむ後の心をさぐる事も出来なかつた。

「Y君 君は泣いて居るんだな又あの日事を思い出したんだらう實際君も淋しい身の上だね」「S君 僕は何時

の間にこんなに涙ぐましい淋しい性分になつたんだらうねい」……

いつも青い空や四方の風景を見つめて居ると自然涙ぐましくなつて来るのだS君ゆるしてくれ給い……せつかく二人して散歩して見たのに……それでも君と二人で居られるだけでもごんなにうれしいか知れない。

「ほんとに何時もこうして二人で居たら……Y君……

……父あつても、母あつても少しも幸福を見出さない僕と……どちらが淋しい……？」青々とした若葉

をつまさきで歩みにじつて、デット地上を見つめてゐる友やはり快活によそはつて居ても淋しい友であつた

「Y君二人とも淋しさはちがつてもやつぱり淋しい二人なんだね」

「いつまでもこうして二人で居られたら家なんかへりたくないね」……

又も同じ事をくりかゝし二人は「あゝ」小さなためいきがもれる二人の心は無言の内に溶け合つて行く。

「S君いくら考へて居てもきりのない事だもう考へまい泣くまい其うらしい唄ふ西條先生の詩を……」

ふら／＼と又唄まつゝ居た扉をひらき得た心は美しい唄のリズムにたく／＼むすびついて行く……。

「けれどもね静ちゃん、妻彼方に嫁つてからも、一時だつて忘れたい事はありませんよ、貴女の事をね、ほんとに世間は苦しいものねえ。」

二人の手は固く／＼握り合つてゐた。

「早いものね、お父様が失くなつてから、早四年になるわね、ほんとにお父様さへ居らして下さつたら……」熱い涙が二人の手の甲にかゝつて、ほろりとコボレ落ちた。

「お母様！あたし淋しくつて仕方ないんですの、どうか度々歸つて頂戴ね。」

「それはね、妻も度々かへりたいんだけど、さう思ふ様にならなくつてねえ、あの高尾の寺から暮合ひの鐘が響いて来る時、妻はたつた一人杉垣の所で泣くのです。」

「お母様！」

「ほんとに何時迄もこうしてゐたいわね。」

固く抱き合つた二人の、着物を透して鼓動が早鐘の様に響いて来る、油の様な大河の面を、漁舟が音もなく下つて行つた。

創作 旗

岡 田 岡 志 雄

「明日入營するの」「エ明日つから兵隊でさあ」木炭問屋で此の山村大半の地主である郡司旦那の邸から出て来た伍三は遠くA山脈が幽んで見える西空を見つめ乍ら敏子に答へた。

美しい山だつた、美しい川だつた、今迄單調だと思つてゐた四圍の風景も再び望むことの出来ない古い昔の幻の様に思はれた、併し美しいと感ずる以外に味ふことの出来ない景色に暗い陰鬱な寂しさ

におそわれるのだつた。

そしてわともすれば浮んでくる涙を自棄的なゆがんだ自己嘲笑に粉らせて感傷的になつてゆく弱い心を強く否定しようとするのだつた「負けてたまるもんか」今迄さび生きてゐた俺等だ、けれど自分と謂ふもの、存在の無力を完全に裏切つてしまつた郡司旦那の嘲笑する様な怒聲を再び反照して見た「フ、ン三月も訓練したら満州まで送られるわに、死に行く様なお前に誰がお前ん家の生活を保護してやられるか死つた親父の借金せー拂ねえお前によ、さ、今日親父の借金の目掛を置いてゆきな」(俺が意気地がなかつたからだ今つからでもかまわね郡司の脈々打殺しつちまを)そんな恐ろしい想像を書えたりした、けれど強い理性は(お前には先の短い祖父がある、心臓に狂つてゐる病氣を征服しようと思ひ續けてゐる阿母があるある筈だ)と狂つてゆく兇暴性を重々しい威嚇をもつてをさびつけてゐた、人と人々が殺し合ふ戦場に俺あゆかなきやあならねいんだ、人間が人間を殺しても罪にならず、殺されても文句の言はれぬ戦争の跡に静かな平和と言ひやがる、其の平和を求めんが爲に俺達兄弟は殺し合ふんだ、殺された兄弟の中にや俺と同じ様な、一人で祖父母を始め親や妻子を養つてゐる男もあるだらう、そうした奴の遺族等、幾十萬の人々が俗悪な物質文明の濁流が渦巻つてゐる地球層の表面に苦んでゆく悶えてゆくそして遂に死の平和な真の幸福な眠の連続に走つて行く、死と生との間に何の希望も光明もなくウゴめいてゐる寂しい人々を数限りなく製造してゆく、それが戦争によつて何千萬の人民の血と肉によつて造りあげられた平和の本体だらうか。

そんなことはないそうした不幸な人々を救ふこと人民の幸福を永續させる爲の戦争でなければならぬ筈だ、一時的國際間の平和を構成せんが爲の戦争ではない筈だ、けれど凄惨な現實の前には外面の美しい人道主義の假面の中に混んでゐる不純な醜い野心を照し出さなければならぬかつた、(郡司の奴あ戦争が来たな此度こそは

秋の詩展覽會

生を得てより、茲に三才、本誌の行く可き方向は示表されて來た。我々は飽んことなき相互的信念の下に進歩して行かれる事を深く喜びたいと思ふ。

本誌は今秋の盛典千才一遇悦歴を期して極めて意義ある「詩の展覧會」を開催して尊き記念の一録とし潤澤ある歎を盡したいと思ふ。

幸ひ諸賢氏の賛助を得てより善き好果を結び得たならば望外とする所である。

—◆出品規定◆—

詩（小曲、民謡）
短歌、俳句
繪畫

大小隨意、一枚一篇、五枚以內
短冊、一枚一首、五枚以內
大小自由、何枚も可し

以上すべて繪をそびたい人はそへる事、色紙の類は特に歡迎す。
一人幾種目出品良し。

第一回終切 七月十日

宛名 詩南社若しくは本誌取扱店

開館期日 昭和三年十月四、五、六日の三日間

日本キリスト平教會（南町裡）

主筆	後援
詩	無軌道
南	
社	社

—◇編輯後記◇—

第十七號出づ活版に改めた詩南車、この堂々たる塞進振りを見て下され給ひ。

またたく詩南車獨特の編輯、惡るい所があつたらざし、云つて戴きたい。

本号今迄にない盛り澤山、それも皆傑作揃ひ、一々云はなくとも見て戴けばそれが

新しい顔振、猪狩氏は北海道、中野氏は

平、館氏は福井、島末氏は廣島の歌人、佐川氏は磐城俳壇の重鎮皆傑物！

波立は僕等の長友、彼れのフロレタリヤ
アートから立脚して先號詩南車の概括的批
判、興味ある問題、遺憾の事は二三抹消し

詩南車　この勢ひであくまで突進したい

我等はライフから藝術に眞實に自己の生命を見つめて生きたい。貧しくともいゝ、

うんとせしめてやるぞと喜んでゐやがつた）（此の前の戦争ん時も金持がうんと出来やがつた。此度の戦は俺達の國の損にはならねえんだと村長がゐつてゐた。

ウフ戦争は苦しい俺達の血を×××××に×××さす爲の闘争だ。俺達に與へて呉れるものは戦争で費つた國費超過の負擔税と盲従さ

せられた採取され盡した骨と皮許りの餓くことの出来なくなつた身体とから解放される死のみなんだ。「俺あ戦争が呪わしい」彼はたゞの一言血を咬られる様な苦みから逃れようと思つて居る自分を意

（敏子さんとも永い別れだ）（夢だつた、今迄の美しい初戀は、何

時か郡司旦那の健次さんとこへ嫁にならなけりやあならない敏子さんだつた。此の儘幻の天女として、汚さぬ初戀の人を見て死ねるの

「敏子さんもう別れだ」彼の言葉が終らぬ内に敏子は彼の胸に縋り付いた、そしてはないた。

其の時だつた、「伍三さん万歳」と大聲に叫びながら水車小屋の仙
ちいさんを先頭に貧しく無智ではあるが清い部落の人々が大きな旗

◆ 投稿規定 ◆

詩	二篇以內
短歌、俳句	一人五首以內
創作（散文、小品、戲曲）	五枚以內

以上全べて原稿用紙使用の事、原稿の最初に種別及住所姓名明記の事、誌上雑感、差支へなし、編輯は編輯部在の事、

封筒には必ず原稿在中として二銭切手貼る事、三十
文まで二銭、

姓名 長島重平 五丁目二八 諱南社一 諱南車 編輯
 部宛の事、
 締切 六月三十日 次号七月廿五日發行

同人をつのる。

- 一、維持費として毎月一回原稿と同時に前納の事
- 二、同人は毎月「詩南車」三部頒布を受く
- 三、同人は自作品に就て發表權利を有す

社友及誌友

片寄秋二	石井賢三	岡田廣光	島田丹光	佐藤義家	鈴木勇男	岡田四郎
全	全	全	全	全	全	全
平野五丁目二八番地	平野大町廿番地	福島石城郡四會町六六番地	福島縣玉置郡北沼田町	埼玉縣見玉郡北沼田町	福島縣平町七丁目八番地	東京市京橋區銀座座町五丁目達堂方

寄贈深謝

廻轉木馬、詩魔、牧人、金瓶蠟、詩美學、井邊之魂
髮師、無軌道、立山詩人、冷燈、黃土詩歌、民謡列
車、詩行街、街歌、紅百合、泥濘、歎ひます、青杉
、表現人、潮、青空、瀬戸、しづく、鄙明、磐梯

本誌取扱店

柴田書店。清光堂分店。マルカ書房。平本ペー
館部。飯田書店。

1 2 3 4 5 6 7 8 10

K. MOROHASHI

DRESS

水！

泡が立つたら

外來者が皆な逃げてしまった

店 張 洗 屋 袋

(り屋町工大) 日 丁 五 町 平

バナ、は智恵實

——バナ、と言ふ語は智恵——
——の實と詳されて居ります——



……さはやな南國のかかほり
……その豊満、甘美の味ひ
……さては萬人の嗜好するところ

TAIWAN FRUITS
STRAIGHT
IMPORTER

萬 屋 商 店

電話 (二七三) 平 四